

## 1. 言葉は漢字で学べ

### “国語”の力は成功の鍵

私は、今から40数年前、次のことを知り、大いに我が意を強くしました。

「国語の力が豊かなことと、成功との

間には、驚くほどの関連がある……あらゆる分野において」という前書きで、「言葉の不思議な力」という文章が、1961年の『リーダーズ・ダイジェスト』の七月号に掲載されました。

アメリカの科学者、ジョンソン・オコナー博士が、人間工学研究所で、あらゆる職業から選んだ35万人以上の人を対象にテストした結果、多くの言葉の意味を正確に知っているということが、他のどんな特性よりも、成功の原因である、ということを実証したというのです。

博士は、中学生・高校生・大学生・工場勤務者から、大会社幹部・監督級にまでテストを行って、地位の上下と収入が国語の力と比例しており、国語の力は学校の成績にも比例している、と言っています。

人は言葉で物事を考えます。ですから、理解する言葉の数が多ければ多いほど、その人の思考の幅は広く、理解する言葉の深さが深

ければ深いほど、思考の精密度も高いわけです。言葉を正確に、豊かに使う人があらゆる方面で成功しているのは、当り前のことだと言えるのです。

コラム

### 部首 主

燈台にあかりのついている象形。家の中心に置かれるので“中心”の意味。キリスト教では中心の意味で、キリストを指して使う。部首としては、“中心に向かって集まる”“集中する”の意味に多く使われる。

【柱】 “家の中心となる木”の意味で“はしら”。大黒柱、支柱。“ささえ”の意味にも使われる。

【注】 川の水が中心である海に向かって“そそぐ”。この主は“集中”の意味に使われる。

【住】 人が集中することで、それは人が都会に集まりすむことを表している。

「動物」は「どうぶつ」に優る

普通、一年生には、動物という言葉、「どうぶつ」というひらがなで教えます。ところが

私は、一年生に、「動物」という漢字で教えました。すると、子供たちは、

「先生『動物』って、『動く物』って読めるね」

と言うのです。私は、

「ああ、そうだよ。チューリップやたんぽぽやさくらの木が生き物だってこと、よく知っているね。でも、草や木は、ひとところに立ったままで、動くことが出来ないだろう。生き物には、動ける物と、動けない物とがあるので、動ける物を、『動く物』と書いて、『動物』ということにしたんだよ」

と、話しました。すると、子供たちは、驚きの目を見張って聞いていましたが、

「先生、じゃあ、とんぼもちょうちょも動物なの！」

と尋ねました。

「ああ、そうだよ」

するとほかの子も尋ねました。

「先生、金魚も？」と。

水の中に住むものは、「さがな」ではあっても、「動物」ではないと、つい今まではそう思っていたに違いないからです。

「ああ、そうだよ。水の中を動きまわるからね」

「先生、ありは動物園にいないけど、やっぱりあれも動物だね」

「先生、人間もやっぱり動物じゃあないの」

とうとう、こんな質問まで出てきました。

動物という言葉は、普通、三、四年生になっても、その正しい概念を理解できないものです。しかし、漢字で学習する私の一年生は、立派に正しい概念を理解することが出来たのです。

「時間」と「時刻」は違う

「集合時間」は、八時半ですよ。間違えないようにね」

などと、先生でさえ平気でこう言っています。しかし、時間とは「時刻と時刻との間」という意味の言葉で、時刻と時間とは明らかに違った意味の言葉です。学校では、くどいほ

ど時刻と時間との使い分けを指導するのですが、その努力にもかかわらずこれを混同してしまっています。これはなぜでしょうか。

それは、「じかん」「じこく」というかな表現で教えているからです。これでは、「じかん」も「じこく」も同じように見えて、一、二年生の子供には、とてもこの区別は付けにくいのです。

しかし、私の指導する一年生は、「時間」「時刻」という漢字でこの言葉を学習しますから、ちゃんと意味や使い方の違いを知っていて、正しくこれを使い分けます。

このように、漢字は、言葉を裏から支えています。この、裏から支えている漢字がよく理解できると、表である言葉の持つ意味は、はっきりとしてきます。その実例はいくつでも挙げる事が出来ます。

英語の綴りは発音通りではない

ここで、英語でも、言葉の正しい意味を文字が支えていることを、お話したいと思います。

います。

one(一つ)、two(二つ).....の「one」という綴りは <sup>オーエヌイー</sup>o n e です。この

三つの文字の発音を連ねますと、<sup>オウヌイー</sup>{ouni:}となります。この{ouni:}というのは、16世紀の頃の発音です。(現在の英語の綴りはこの頃制定されました。) <sup>オウヌイー</sup>{ouni:}が<sup>オウン</sup>{oun}に変わり、さらに<sup>ウウン</sup>{oun}に変わり、現在の<sup>ウン</sup>{un}に変わりました。

では、こんなに変わったのに、なぜ表音文字を使っている英語が、昔の綴りを変えないで使っているのでしょうか。

それは、「o, n, e」という三字の組み合わせが、四世紀もの長い間に

コラム

**部首 夂**

戈は“ほこ”の象形字。ほこには、“矛”“干”などの象形字もあり、“干戈”で戦争の意味にも使う。夂は、ほこを交えた形だから“戦う”“きずつけあう”のが本義。部首としては、“きずつけそこなえばなくなる”ことから“わずか”の意味に使う。

【浅】 水がわずかということで“あさい”ことを表している。今では水に限らず、“学問が浅い”などとも使う。

【銭】 わずかなお金の単位(一円の百分の一)に使われる。

【残】 わずかな骨(歹は骨の一部を表した形)ということで、“食べ残り”の意味を表したもの。

渡って意味を表す表意文字のような効果を持つようになったからです。

フランスの言語学者ソシュールは、これを「表音文字の表意化」と呼んでいます。つまり、発音を表す表音文字が、漢字と同じように意味も表すという効果を持つようになったということです。

「alone(ひとりで)」「only(ただ一つ)」の「one(on)」は、ワン、ツ一の「one」と同じ意味で、しかも、発音は16世紀の頃の音に近いものを今もなお保っています。ところが、「one」の発音が(w n)になったからと言って「won」と綴りを変えたら、「win(勝つ)」の過去を示す言葉の「won」と間違えやすくなってしまいます。そればかりではありません。「alone」や「only」との意味のつながりが切れ、それらの持つ意味をはっきりと掴むことが難しくなってしまいます。それを恐れるから、「one」という綴りを変えないのです。

このように、英語でも、文字が言葉の意味を支えているのです。文字を知っているのと知らないのとでは、同じ言葉でも、その深さが、味わいが、ぐんと違ってきます。